

これまで、
これから。

2



YEARS

広域合併20周年記念誌



目次

- 1 ご挨拶
- 2 JA たじまのあゆみ
- 6 歴代役員
- 8 20年間の主な受賞歴
- 9 組合状況の推移
- 10 コウノトリ育むお米
- 12 但馬の米づくり
- 13 重点振興品目
- 14 地域振興品目
- 15 ファーマーズマーケットたじまんま
- 16 但馬牛
- 18 地域ふれあい活動・地域貢献の取り組み
- 19 主な事業の紹介／子会社事業の紹介
- 20 組合長×職員座談会 合併から20年JA たじまの未来を語る

JA 綱領

わたしたち JA のめざすもの

わたしたちJAの組合員・役員は、協同組合運動の基本的な定義・価値・原則（自主、自立、参加、民主的運営、公正、連帯等）に基づき行動します。

そして、地球的視野に立つて環境変化を見通し、組織・事業・経営の革新をはかります。さらに、地域・全国・世界の協同組合の仲間と連携し、より民主的で公正な社会の実現に努めます。

このため、わたしたちは次のことを通じ、農業と地域社会に根ざした組織としての社会的役割を誠実に果たします。

わたしたちは、

一、地域の農業を振興し、
わが国の食と緑と水を守ろう。

一、環境・文化・福祉への貢献を通じて、
安心して暮らせる豊かな地域社会を築こう。

一、JAへの積極的な参加と連帯によって、
協同の成果を実現しよう。

一、自主・自立と民主的運営の基本に立ち、
JAを健全に経営し信頼を高めよう。

一、協同の理念を学び実践を通じて、
共に生きがいを追求しよう。

ご挨拶



但馬の農業と暮らしを次代につなぐために

J A たじま広域合併20周年記念誌の発刊にあたりご挨拶申し上げます。

J A たじまはこのたび、平成13年4月1日の広域合併から20年の節目を迎えることができました。これもひとえにJ A たじまの協同組合運動に対する組合員の皆さまをはじめとした先人の多大なる努力とご理解、ご協力によるものとして感謝と敬意を表します。

この20年を振り返りますと、J A 経営においては、社会の変化と時代のニーズに対応しようと努力を重ねてきた歴史であったように思います。平成16年には大規模な支店再編を実施するなど、向こう20年を見た経営体制の確立を急ぎました。また、同年の食糧法改正により米流通の自由化が進み、産地間競争が激化する中、J A たじまでは但馬の豊かな環境を守る「環境創造型農業」を進め、米や野菜など、その考えは但馬の農産物に広く根付くようになりました。こうした取り組みは社会の「安全安心」のニーズにつながり、今では但馬の農産物の強みとして、販売にも寄与するようになっていきます。特に「コウノトリ育むお米」関連の取り組みは行政や関係機関から高い評価をいただくまでに成長し、現在では「コウノトリ育むお米」を但馬の農業の旗印として、国内外での但馬の農産物のさらなる販売拡大に向けた挑戦を続けています。また、特産品についても、「たじまピーマン」が関西圏で最大の産地に成長した他、但馬牛も子牛の飼養頭数が管内で四千頭を超えるまでに増頭するなど、産地の維持・拡大を果たすことができました。組合の皆さまのたゆまぬ努力に重ねて敬意を表します。

他方、国連が平成24年を「国際協同組合年」に定めるなど、拡大する格差や諸問題への解決に関して、協同組合の「相互扶助」の理念が国際的にも高く評価・期待されています。但馬地域においても人口減少や高齢化など地域の持続可能性が大きな課題となっています。J A たじまでは国連が掲げた持続可能な開発目標「SDGs」を踏まえつつ、地域の農業、組合員の生活をしっかりと守り、継続していくことを使命として、これからも協同組合運動に取り組んでまいります。

結びになりますが、現在のJ A たじまは合併前から脈々とつながる組合員の歩みと、それを支えた多くの役員職員の努力の上に成り立っています。昨今の金融情勢や新型コロナウイルスの感染拡大はJ A 経営・事業運営にあらたな変化を求めています。先人が築き上げたJ A を次の20年につなげていくため、しっかりと環境の変化に対応し、組合員の負託に応えることができるよう役員一同J A 運営に邁進してまいりますので、組合員の皆さまには一層のご理解とご参画を賜りますようお願いし、本誌発刊のご挨拶とさせていただきます。

たじま農業協同組合 代表理事組合長 太田垣 哲男

JAたじまのあゆみ

JAたじまの動き

平成7年度	4月	豊岡市・香住町・但馬日高・出石郡農協が合併して、たじま農協が発足
	6月	たじまJA女性会設立総会
	7月	JAたじま旅行センターオープン
		第1回JAたじまゴルフ大会
		第1期農協総代500名選出
	12月	第1回JAたじま地区対抗ソフトボール・バレーボール大会
	2月	JAたじま第1回臨時総会
		JAたじま第1回有線放送のど自慢大会
		第1回JAたじま囲碁大会
平成8年度	5月	第1回通常総代会
		JAたじま事業進捗大会
	11月	豊岡北支店新築オープン
		出石支店改装オープン
		年金友の会大会
	3月	精米施設竣工式
平成9年度	2月	但馬地区つちかおり米生産出荷10周年大会
平成10年度	6月	ピーマン自動選別包装施設竣工式
		無人ヘリコプター導入
	7月	子会社「(株)ジェイエイ葬祭」設立
	10月	有限会社「グリーンたじま」設立(平成18年度清算)
	11月	「トライやるウィーク」受入
平成11年度	5月	たじまJA女性会カルチャースクール開講
	6月	第1回水稲現地指導会
	7月	子会社「(株)ジェイエー・アクロス」設立
	3月	豊岡水稲育苗施設完成
平成12年度	4月	訪問介護事業開始
	5月	居宅介護支援事業開始
		第1回地区別懇談会
	8月	但東支店新築オープン
	10月	豊岡南支店新築オープン、LPガスバルク供給第1号供給開始
	11月	JAたじまホームページ開設
	12月	合併予備契約調印式
	1月	(株)ジェイエー葬祭和田山営業所開設 子会社「(株)ジェイエーサポート」設立



豊岡南支店新築オープン(平成12年)



第1回通常総代会(平成8年)



豊岡水稲育苗施設完成(平成11年)



第1回水稲現地指導会(平成11年)



第1回JAたじま囲碁大会(平成7年)

世界の動き

平成7年度	食管法廃止と新食糧法施行
平成8年度	JA改革関連2法成立 腸管出血性大腸菌O157大発生 アトランタオリンピック ペルー日本大使館占領事件
平成9年度	農水省「新たな米政策大綱」発表 東京湾アクアライン完成 消費税5%スタート 長野冬季オリンピック
平成10年度	農政改革大綱決定 明石海峡大橋開通 金融制度改革(日本版ビッグバン) スタート ヨーロッパ統一通貨、ユーロ誕生
平成11年度	米関税化、食料・農業・農村基本法公布 食料・農業・農村基本法施行 しまなみ海道開通 地域振興券交付
平成12年度	WTO農業交渉開始 シドニーオリンピック 鳥取県西部地震 三宅島噴火 広島県芸予地震

平成13年度

4月 たじま・兵庫みかた・養父郡・朝来郡農協が合併して、
新「たじま農協」が発足

5月 たじまJA女性会設立総会

6月 温泉町産直部会設立委員会

7月 JAたじまつちかわり米協議会設立総会

8月 JAたじま和牛部会設立役員会

9月 BSE対策会議

10月 さつ支店新築オープン

11月 朝来郡岩津ねぎ部会設立総会

12月 神鍋冬山生活センター開設

1月 JAたじまヒーマン協議会設立総会並びに生産者大会

平成14年度

4月 豊岡市東デイサービスセンター・豊岡市東在宅介護支援センター受託開始

5月 日高農産物直売所オープン

6月 たじま和牛女性会設立

7月 第1回たじま農業協同組合東部和牛共進会

8月 第1回JAたじま但馬産牛神戸ビーフ枝肉共励会

9月 第1回臨時総代会

平成15年度

6月 JAたじま特別栽培農産物認定制度「コノトリの贈り物」を創設

7月 村岡種子センター増改築工事完成稼働式

8月 JAたじま農業資材センター豊岡店新築オープン

9月 第1回全国和牛系統研究会

平成16年度

6月 出石農産物直売所オープン

7月 台風23号による農林業被害対策に係わる説明会

平成17年度

4月 出石温泉館「乙女の湯」農産物直売所オープン

5月 広報誌「リレーション」全紙面フルカラー化

6月 JAたじま農産物直売所八鹿店オープン

7月 合併5周年記念「但馬の野菜つくり」発刊

8月 香住梨自動選果施設完成

9月 大屋支店新築オープン

10月 Aコープ和田山店内に農協の八百屋さんオープン

11月 第1回デイサービスセンターふれあいまつり

12月 山東支店改築オープン

平成18年度

5月 コープデイズ豊岡内に農協の八百屋さんオープン

6月 山東富農生活センター新築オープン

7月 JAたじま米振興会設立総会

8月 農業資材センター八鹿店新築オープン

平成19年度

4月 水稲育苗センター稼働開始

5月 地域団体商標「但馬牛」を登録

6月 関宮支店新築オープン

7月 湯村家畜市場を但馬家畜市場へ統合、150年以上の歴史に幕

8月 おおや高原有機野菜部会が環境保全型農業推進コンクールで「大賞（農林水産大臣賞）」を受賞



香住梨自動選果機稼働(平成17年)



朝来郡岩津ねぎ(平成13年)



子牛せり市(湯村)(平成19年)



出石農産物直売所オープン(平成16年)



JA たじま農業資材センター豊岡店オープン(平成15年)

平成13年度

国内初のBSE発生
アメリカ同時多発テロ発生
愛子さまご誕生

平成14年度

WTO農業交渉でモタリティ交渉
米政策改革大綱の決定
ベトナム制度解禁
日韓共催のW杯サッカー開幕
イラク戦争勃発

平成15年度

食品安全基本法公布、米国産
牛肉輸入禁止
SARS(重症急性呼吸器症候群)
流行
国内で鳥インフルエンザ発生

平成16年度

改正食糧法施行
米政策改革スタート
WTO一般理事会で枠組み合意
アテネオリンピック
新潟県中越地震
新1万円、5千円、千円札発行
スマトラ島沖地震
愛知・中部国際空港開港
福岡県西方沖地震発生

平成17年度

食料・農業・農村基本計画を
改定、食育基本法公布
ベトナム全面解禁
個人情報保護法全面施行
道路4公団民営化
トリノ冬季オリンピック
(フィギュアで日本人初の金メダル)

平成18年度

ポジティブリスト制度施行
担い手経営安定新法成立
日銀がゼロ金利解除

平成19年度

水田・畑作経営所得安定対策
スタート
食品表示偽装相次ぐ
米サブプライムローン問題で
世界同時株安
民営郵政公社が発足

JAたじまの動き

平成20年度	4月	(株)ジェイエイ葬祭「メモリアルホールゆうなぎ」新築オープン 温泉RC能力増強工事完成 美方郡種子乾燥施設完成 生野支店新築オープン 村岡米が、米・食味鑑定コンクールで3年連続「金賞」を受賞 竹野支店新築オープン JAたじま浜坂朝市婦人会が近畿地産地消費優良活動表彰で「近畿農政局長賞」を受賞
平成21年度	4月	あぐりキッズスクール開校 八鹿RC能力増強工事完成 コウノトリ育むお米生産部会が「生物多様性日本アワード 優秀賞」を受賞 コウノトリ育むお米推進協議会設立総会 ふるさと但馬米振興会設立総会 みかた棚田米生産部会設立総会 八条支店新築オープン 朝倉さんしよ部会設立総会
平成22年度	11月	コウノトリ育むお米の取り組みが「第12回グリーン購入大賞 環境大臣賞」を受賞 岩津ねぎ産地協議会設立総会 温泉支店新築オープン
平成23年度	6月	ファーマーズマーケット「たじまま」新築オープン JAグループ兵庫の東日本大震災災害復旧ボランティア活動の員として、職員4名を被災地へ派遣 美方支店新築オープン 「第25回JA広報大賞」活動優良JA選定・ホームページの部優秀賞を受賞
平成24年度	6月	たじまま創業祭 広谷支店新築オープン コウノトリ育むお米の取り組みが「第42回日本農業賞 第9回 食の架け橋賞 大賞」を受賞 「兵庫県但馬朝倉さんしよ食の匠推進協議会」設立
平成25年度	12月	肉の店 温泉本店新築オープン たじまま来店50万人突破記念セール
平成26年度	4月	七釜アイサードセンター新築オープン 豊岡ショートステイ新築オープン このとりのカントリーエレベーター起工式 (株)ジェイエイ葬祭「メモリアルホールゆうなぎ」新築オープン



ファーマーズマーケット「たじまま」新築オープン
(平成23年)



ふるさと但馬米振興会設立総会
(平成21年)



あぐりキッズスクール開校(平成21年)



豊岡ショートステイ開業(平成26年)



肉の店 温泉本店新築オープン
(平成25年)



「第12回グリーン購入大賞 環境大臣賞」
受賞(平成22年)



村岡米が、米・食味鑑定コンクールで
3年連続「金賞」を受賞(平成20年)

2010

世界の動き

平成20年度	FAO世界食糧サミット(ローマ) WTO交渉決裂 北海道・洞爺湖サミットが開幕 北京オリンピック 米証券大手のリーマン・ブラザーズ経営破たん 米大統領にバラク・オバマ氏が就任
平成21年度	農地法改正 新型インフルエンザ流行 政権交代(自民党から民主党へ)
平成22年度	農業者戸別所得補償モデル事業スタート 宮崎県で家畜伝染口蹄疫感染症拡大 東日本大震災(3・11) 九州新幹線全線開通
平成23年度	農業者戸別所得補償制度本格化 テレビのアナログ放送が終了し、地上デジタル放送に完全移行 東京スカイツリー竣工
平成24年度	ロンドンオリンピック 米大統領選 バラク・オバマ氏が再選 中国共産党総書記に習近平氏が就任 政権交代(民主党から自民党へ) 安倍首相がTPP(環太平洋パートナーシップ協定)への参加を表明
平成25年度	規制改革会議本会議及び農業ワーキンググループ会議の開催 富士山が世界文化遺産に登録 2020年夏季オリンピック、東京開催が決定 特定秘密保護法が成立 ソチ冬季オリンピック

平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
4月 やさしい有機農業教室開講式 ミラノ国際博覧会日本館兵庫県プロモーション出展 (株)ジェイ・アクロス・出石自動車サービスセンター「新築オープン」 こうのとりカントリーエレベーター完成 出石営農生活センター新築オープン たじまみま来店100万人突破フェア 出石支店新築オープン	7月 新本店の改修工事が完了。豊岡市九日市へ本店機能を移転・集約 営農振興大会開催 国際総合食品見本市「ガルフード2017」コウノトリ育むお米出展 (トハイ) 全中通常総代会「平成28年度優良農業協同組合」表彰受賞 養父水稲種子センター能力増強工事完成	4月 (株)ジェイ・アクロス八鹿セルフ給油所「新築オープン」 つちかおり米30周年記念式典 大相撲但馬場所後援 コウノトリ育むお米使用泡盛「幸鶴舞」発売開始 酒米「フクノハナ」契約栽培30周年記念式典 クールジャパンアワード2017受賞 コウノトリ育むお米GLOBAL G.A.P.グループ認証を取得 「ジャパニーズフードフェスティバル」コウノトリ育むお米出展(ロサンゼルス) 和田山支店・営農生活センター・介護センター・グリーンセンター新築オープン	7月 シンガポール日本人小学校にて食農・食育教育講演で 「コウノトリ育むお米」を紹介 つちかおり米協議会・出石フクノハナ生産部会が「但馬産業大賞」を受賞 JAファーマーズ・たじまみま和田山ランドオープン コウノトリ育むお米生産部会が「第20回米・食味鑑定コンクール 特別優秀賞」を受賞 「兵庫美地方地域の但馬牛システム日本農業遺産認定 村岡(米)生産組合が「近畿地域未来につながる持続可能な農業推進コンクール (有機農業・環境保全型農業部門)近畿農政局長賞」を受賞	6月 たじまみま来店200万人突破 多収種米初出荷式 ふるさと但馬米生産10周年出荷式 「近畿地域未来につながる持続可能な農業推進コンクール G・GAP部門 近畿農政局長賞」を受賞	4月 朝倉さんしよ地域団体商標取得 たじまみまルート便運行開始 日高営農生活センター新築オープン コウノトリ育むお米の取り組みが「未来につながる持続可能な農業推進 コンクール(有機農業・環境保全型農業部門)農林水産大臣賞」を受賞

2015



こうのとりカントリーエレベーター完成(平成27年)



第20回米・食味鑑定コンクールにてコウノトリ育むお米が「特別優秀賞」を受賞(平成30年)



JAファーマーズ・たじまみま和田山ランドオープン(平成30年)



コウノトリ育むお米の取り組みが「未来につながる持続可能な農業推進コンクール」で農林水産大臣賞を受賞(令和2年)



コウノトリ育むお米GLOBAL G.A.P.グループ認証を取得(平成29年)



営農振興大会開催(平成28年)

平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
農協・農業委員会・農民生産 法人の改革推進 消費税率が8%に引き上げ 北陸新幹線開業	選挙権年齢を「18歳以上」に引き 下げる改正公職選挙法が成立 東日本豪雨により鬼怒川が氾濫 マイナンバー制度が開始される 北海道新幹線開業	農協法改正 熊本地震が発生 リオデジャネイロオリンピック ドナルド・トランプ氏が 米大統領に就任	九州北部豪雨による被害が 広がる 平昌冬季オリンピック TPP11(環太平洋経済連携 協定)発効 米の生産調整見直し 西日本豪雨が発生する 築地市場から豊洲市場へ移転	日米貿易協定の最終合意 天皇陛下ご即位 令和に改元 消費税が10%に引き上げられる 首里城が火災により焼失 中国・湖北省武漢市で 新型コロナウイルス感染症の報告	新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告	新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告 新型コロナウイルス感染症の報告

歴代役員

※平成13年4月1日の広域合併後、初回となる同年6月26日総代会で承認された役員以降の歴代役員を掲載しております。
※役員任期は平成7年4月1日の旧J A たじま発足時を第1期としております。

第3期役員名簿

〔任期〕 平成13年6月26日（就任後1年以内の最終決算期に関する通常総代会の終了時）

会長理事	尾形 弘之
代表理事組合長	田口 義修
副組合長理事	濱 壽雄
副組合長理事	神吉 靖次
副組合長理事	田淵 徳左衛門
代表理事専務	金子 洋一
常務理事	小山 成行
常務理事	多田 博
常務理事	藤岡 美智夫
常務理事	治部 進一郎
常務理事	休 睦男
常務理事	三谷 伊佐男
理事	大字 健一
理事	宮城 五郎右衛門
理事	西村 悌六
理事	奥田 和夫
理事	岩本 忠司
理事	谷原 昌宏
理事	和田 與八郎
理事	橋本 久男
理事	安井 弘義
理事	池口 重雄
理事	福井 輝久
理事	西川 克孝
理事	水田 英之
理事	吉村 春巳
理事	井上 善信
理事	正垣 悦男
理事	和田 千萬億
理事	足立 久夫
理事	大川 保
理事	居相 良春
代表理事・常勤監事	田上 勝己
監事	黒林 太一郎
監事	長瀬 功尚
監事	奥田 象造
監事	内田 皓一
監事	藤原 義章
員外監事	小田 昂

第4期役員名簿

〔任期〕 平成14年6月22日（平成17年の通常総代会終了時）

代表理事組合長	田口 義修
代表理事専務	金子 洋一
常務理事	藤岡 美智夫
常務理事	治部 進一郎
常務理事	休 睦男
常務理事	石田 廣和
常務理事	三谷 伊佐男
常務理事	大字 健一
理事	宮城 五郎右衛門
理事	西村 悌六
理事	奥田 和夫
理事	長 昌男
理事	田門 信二
理事	橋本 久男
理事	長谷川 薫
理事	植田 安雄
理事	池口 重雄
理事	田野 吉左衛門
補欠選任 平成16年6月26日以降	田野 吉左衛門
理事	吉田 道夫
理事	谷田 一成
理事	濱 壽雄
理事	吉村 英之
理事	正垣 善信
理事	和田 悦男
理事	足立 千萬億
理事	大川 久夫
理事	山本 良男
理事	和田 良春
常勤監事	神吉 靖次
監事	柴垣 仁司
監事	奥田 智雄
監事	内田 象造
監事	藤原 皓一
員外監事	井上 義修

第5期役員名簿

〔任期〕 平成17年6月25日（平成20年の通常総代会終了時）

代表理事組合長	田口 義修
代表理事専務	金子 洋一
常務理事	藤岡 美智夫
常務理事	休 睦男
常務理事	中野 成見
常務理事	林 宜克
常務理事	石田 廣和
常務理事	原田 益男
常務理事	大字 健一
理事	宮城 五郎右衛門
理事	田中 幸一
理事	奥田 和夫
理事	長 昌男
理事	田門 信二
理事	水田 喜彦
理事	植田 政彦
理事	植田 安雄
理事	池口 重雄
理事	田野 眞吉
理事	田中 董
理事	谷田 一成
理事	濱 壽雄
理事	吉村 英之
理事	正垣 善信
理事	和田 悦男
理事	小島 英雄
理事	小谷 竹男
理事	福富 道康
理事	篠木 勤
常勤監事	神吉 靖次
監事	柴垣 仁司
監事	近本 恭介
監事	吉田 道夫
監事	内田 皓一
監事	松野 克義
員外監事	井上 義修

第6期役員名簿

〔任期〕 平成20年6月21日（平成23年の通常総代会終了時）

代表理事組合長	金子 洋一
代表理事専務	中野 成見
常務理事	林 宜克
常務理事	津崎 義美
常務理事	中村 幸一
常務理事	田中 美智子
常務理事	谷岡 東洋晴
常務理事	原田 益男
常務理事	平田 敏通
常務理事	宮城 五郎右衛門
常務理事	神谷 松治郎
常務理事	澤田 孝江
常務理事	田口 勤
常務理事	谷口 喜彦
常務理事	水田 喜彦
常務理事	河越 敦利
常務理事	川元 勝茂
常務理事	楠田 信二
常務理事	田門 能章
常務理事	福本 浩三
常務理事	休 睦男
常務理事	池田 喜代子
常務理事	勝地 貞一
常務理事	長島 達男
常務理事	藤岡 美智夫
補欠選任 平成21年6月27日以降	寺尾 英之
理事	吉村 英之
理事	小島 登雄
理事	須磨 五郎
理事	佐藤 巖
理事	藤岡 隆夫
理事	藤岡 登志子
理事	近本 恭介
理事	寺口 良一
理事	高岡 正
理事	松野 克義
員外監事	井上 義修



第10期 代表理事組合長
太田垣 哲男



第8～9期 代表理事組合長
尾崎 市朗



第6～8期 代表理事組合長
金子 洋一



第3～5期 代表理事組合長
田口 義修



第3期 会長理事
尾形 弘之

第7期役員名簿

〔任期〕 平成23年6月25日
平成26年の通常総代会終了時

代表理事組合長	金子 洋一
代表理事専務	尾崎 市朗
常務理事	林 宜克
常務理事	中村 重信
常務理事	津崎 義美
常務理事	友田 達也
常務理事	井川 栄治
常務理事	加悦 富美恵
常務理事	花光 敏博
常務理事	平井 敏通
常務理事	平田 敏通
常務理事	衣川 清喜
常務理事	田口 孝江
常務理事	谷口 勤
常務理事	水田 喜彦
常務理事	井上 多喜男
常務理事	後垣 晶一
常務理事	小谷 正美
常務理事	田野 新一
常務理事	八木 喜代恵
常務理事	休 睦男
常務理事	秋山 雅裕
常務理事	池田 喜代子
常務理事	寺尾 稔
常務理事	長島 達男
常務理事	小牧 昌子
常務理事	須磨 隆夫
常務理事	藤本 隆夫
常務理事	森田 利秋
常務理事	米田 哲男
常務理事	柴垣 仁司
常務理事	太田垣 勝利
常務理事	川元 仁司
常務理事	高岡 正
常務理事	杉本 武
常務理事	北見 郁雄

第8期役員名簿

〔任期〕 平成26年6月21日
平成29年の通常総代会終了時

代表理事組合長	金子 洋一
代表理事専務	尾崎 市朗
常務理事	尾崎 市朗
常務理事	友田 達也
常務理事	藤林 敏彦
常務理事	稲葉 誠
常務理事	井川 栄治
常務理事	岩下 廣司
常務理事	加悦 富美恵
常務理事	小島 昭則
常務理事	花光 秀典
常務理事	太田垣 誠一
常務理事	狩野 清美
常務理事	原 明治郎
常務理事	藤田 孝二
常務理事	井口 多喜男
常務理事	井上 庄二
常務理事	亀村 重信
常務理事	中村 保子
常務理事	前田 宏昭
常務理事	寺尾 三保子
常務理事	鷹野 唯司
常務理事	田路 達男
常務理事	長島 三千雄
常務理事	木下 恭子
常務理事	城本 孝
常務理事	田中 薫
常務理事	森田 利秋
常務理事	米田 哲男
常務理事	太田垣 達司
常務理事	橋本 義嗣
常務理事	片山 勝裕
常務理事	川元 利雅
常務理事	秋山 雅裕
常務理事	宮田 利雄
常務理事	北見 郁雄

第9期役員名簿

〔任期〕 平成29年6月24日
令和2年の通常総代会終了時

代表理事組合長	尾崎 市朗
代表理事専務	友田 達也
常務理事	藤林 敏彦
常務理事	山下 正明
常務理事	西谷 浩喜
常務理事	井川 栄治
常務理事	稲葉 世津子
常務理事	岩下 廣司
常務理事	太田垣 哲男
常務理事	小島 昭則
常務理事	狩野 誠一
常務理事	原 清美
常務理事	藤田 明治郎
常務理事	細谷 文夫
常務理事	井口 多喜男
常務理事	井上 隆
常務理事	中村 重信
常務理事	野畑 輝行
常務理事	中村 保子
常務理事	前田 宏昭
常務理事	小川 三保子
常務理事	鷹野 唯司
常務理事	田路 達男
常務理事	荒川 安子
常務理事	居相 正美
常務理事	木下 三千雄
常務理事	中尾 孝
常務理事	森田 利秋
常務理事	橋本 達司
常務理事	岩井 継郎
常務理事	小谷 正美
常務理事	秋山 雅裕
常務理事	長岡 文男
常務理事	米田 利秋
常務理事	北見 郁雄

第10期役員名簿

〔任期〕 令和2年6月20日
令和5年の通常総代会終了時

代表理事組合長	太田垣 哲男
代表理事専務	山下 正明
常務理事	西谷 浩喜
常務理事	津山 秀和
常務理事	仙賀 世津子
常務理事	尾崎 市朗
常務理事	小島 昭則
常務理事	西沢 泰裕
常務理事	花光 清亮
常務理事	岡森 誠一
常務理事	狩野 博子
常務理事	早水 文夫
常務理事	岡谷 正貴
常務理事	須川 多華子
常務理事	竹中 敦
常務理事	田中 芳秀
常務理事	中村 優
常務理事	森脇 薫
常務理事	上垣 美由紀
常務理事	小川 宏昭
常務理事	藤原 敏彦
常務理事	居相 正美
常務理事	大槻 勝久
常務理事	梶本 さつき
常務理事	谷村 一好
常務理事	中尾 孝幸
常務理事	橋本 達司
常務理事	天橋 徹
常務理事	岩井 継郎
常務理事	正垣 豊
常務理事	藤田 明治郎
常務理事	宮脇 敬一
常務理事	生駒 敬一



20年間の主な受賞歴

AWARDS



平成13年度

第83回兵庫県畜産共進会 種牛の部 団体優勝
(以降、第84、85、87～91、93、96～102回で団体優勝)

平成18年度

第88回兵庫県畜産共進会 肉牛の部 団体優勝
(以降、第96～98、100～102回で団体優勝)

平成21年度

第1回生物多様性日本アワード 優秀賞

平成22年度

第12回グリーン購入大賞 環境大臣賞

平成24年度

第42回日本農業賞 第9回食の架け橋賞 大賞

平成29年度

クールジャパンアワード2017 受賞

令和元年度

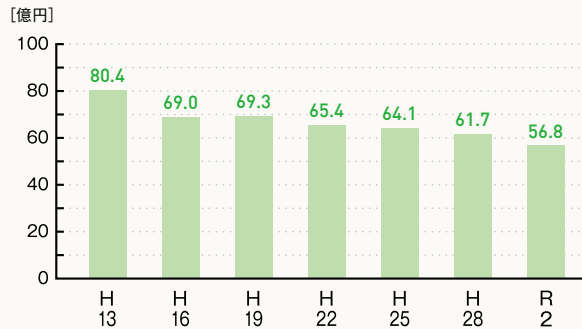
近畿地域未来につながる持続可能な農業推進コンクール GLOBAL.G.A.P.部門
近畿農政局長賞

令和2年度

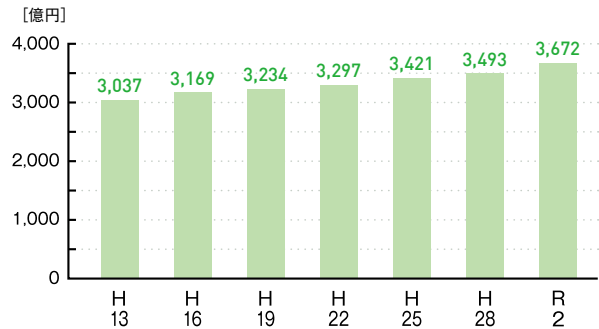
未来につながる持続可能な農業推進コンクール 有機農業・環境保全型農業部門
農林水産大臣賞

組合状況の推移

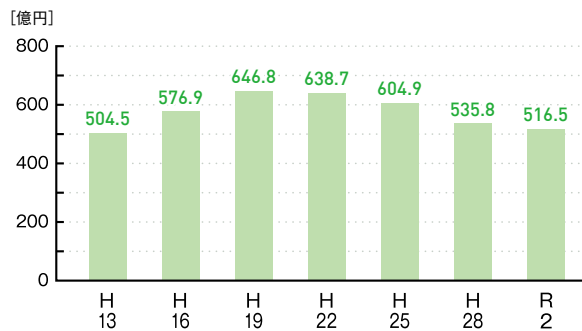
事業総利益



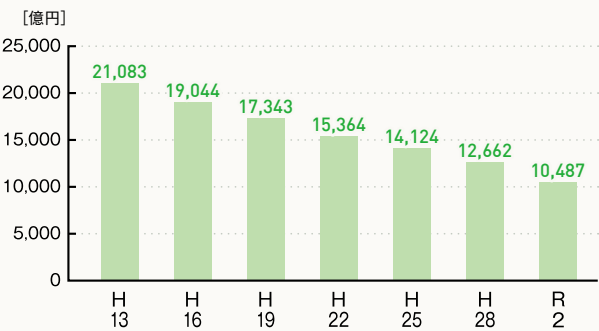
貯金



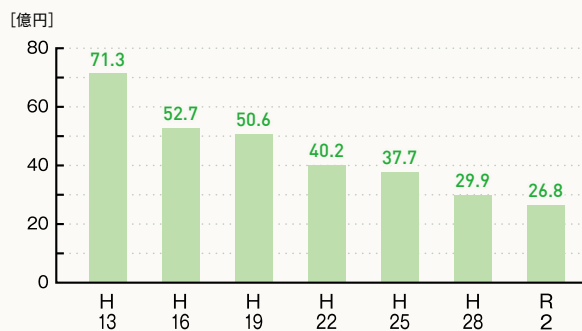
貸出金



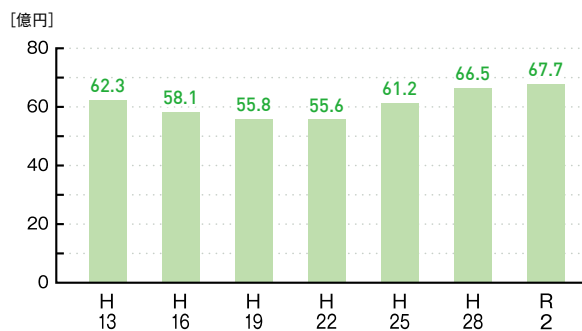
長期共済保有高



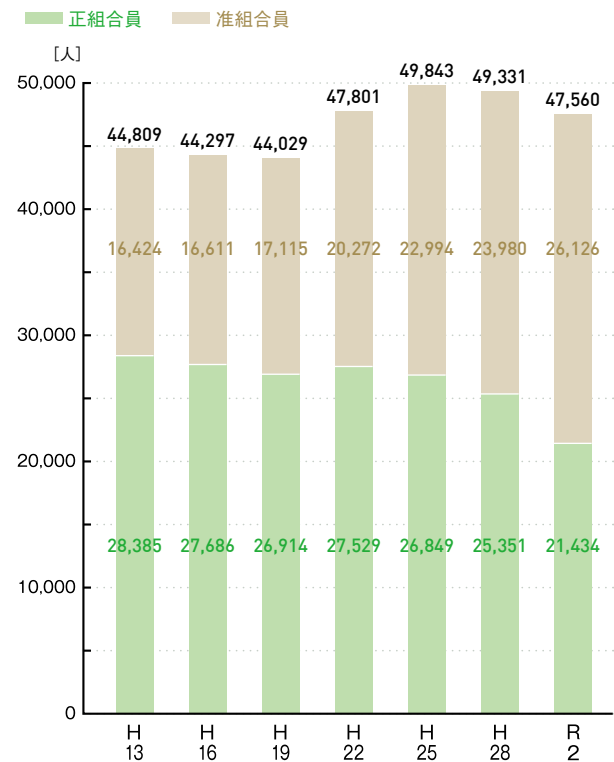
購買品供給高



販売品販売高



組合員数





コウノトリ育むお米

日本では昭和46年に絶滅した野生のコウノトリ。その最後の生息地となった但馬地域では、絶滅要因を真摯に受け止め、コウノトリが天空を舞う風景を取り戻すための環境整備が進められ、平成17年に5羽のコウノトリが放鳥されました。こうした取り組みのなかで確立した「コウノトリ育む農法」で作られているのが「コウノトリ育むお米」です。



コウノトリをふたたび大空に一。“最後の生息地”ならではの思い

コウノトリの 野生復帰を目指して

豊岡市でコウノトリの保護活動が始まったのは昭和30年のこと。人工巣塔すとうの設置や環境保全などが試みられましたが、努力はなかなか実を結ばず、昭和40年に人工飼育がスタートしました。「いつか必ず、大空に帰してあげるから」野生のコウノトリを檻に入れるとき、豊岡の人々は心に誓ったといえます。その後、野生のコウノトリは絶滅しましたが、平成17年に人工飼育された5羽のコウノトリが豊岡の空に解き放たれ、野生復帰への第一歩が記されました。放鳥されたコウノトリが野生復帰

し、安全に暮らすためには、絶滅を招いた要因を改善し、田んぼを餌場として機能させる必要があります。そこで、慣行栽培の農法を見直し、農業や化学肥料を削減した米づくりがスタート。おいしいお米と多様な生き物を育み、コウノトリも住める豊かな文化・地域・環境の実現を目指す農法として「コウノトリ育む農法」と呼ばれています。

「コウノトリ育む農法」 確立への道のり

「コウノトリ育む農法」では、生き物が生息しやすい環境をつくるために、冬の田んぼにも水を張る「冬みず

田んぼ（冬季湛水）」をはじめとする水管理、化学肥料の不使用、無農薬または減農薬（魚毒性の低いものに限る）での栽培を実践。現地での試験や調査を繰り返して、現場での解決が困難な課題については試験研究機関とも連携して解決を図り、体系化が進んでいます。今も発展途上の農法ですが、生産者、県や市、JAによる三位一体の普及体制により、但馬地域の米づくりの一つとして確立しつつあります。

作付面積の拡大と

販路・販売の拡大が課題

今後の課題は、現在、但馬の水稲作付面積の約10%しかない「コウノトリ育む農法」の面積の拡大です。安全・安心でおいしい米づくりを実践する仲間づくりを進めています。加えて、産地交流会などを通じて、「コウノトリ育む農法」の理念や、コウノトリが暮らせる環境づくりが未来につながっていくという持続的な価値を伝える活動も行っています。

また、「コウノトリ育むお米」をその価値とともに少しでも多くの消費者に届けたいという思いから、JAによる直接販売に取り組んでいます。国内では東は関東、南は沖縄県で販売しており、海外では8か国に定期輸出をしています。引き続き、イン

ターネット販売などさらなる販路・販売の拡大に取り組んでいきます。

「コウノトリと共に暮らす」これが但馬の原風景。この風景を未来永劫保つことが人々の安全・安心な食と暮らしにつながるという自負のもと、これからも「コウノトリ育むお米」の取り組みが続けていきます。



コウノトリ育むお米生産部会長
村田 憲夫さん



店頭に並ぶ「コウノトリ育むお米」

消費者とコウノトリの 安心・安全を追求する米づくり

コウノトリ育む農法は、諸先輩と行政、たじま農協が三位一体となり、消費者とコウノトリの安心・安全を追求してきた農法です。

野生では一度減ってしまったコウノトリを再び大空へ放鳥するという物語を紡いできた農法を通じ、仲間と耕作面積を増やしてきました。令和3年度からは「ビオトープ米プラス」の作付けもスタート。消費者のニーズにあったお米づくりを目指すとともに、コウノトリが住める圃場の拡大に挑戦していきます。



人工巣塔で営巣するコウノトリのカップル

但馬の米づくり

コシヒカリを中心に、安全で高品質な米の生産に取り組む但馬地域は、兵庫県産米の優良産地として高い評価を得ています。

ふるさと但馬米

但馬全域で作付けされている特別栽培コシヒカリ。米の仕入れ販売を行う企業と契約栽培を行っており、生産者と流通関係者が一体となつて、米と一緒に「育った環境」や「込められた思い」も食卓に伝えていきます。朝来市に産地交流田を設置し、消費者とともに、田植えや稲刈り、生き物調査などの交流を通じて五感で体験できる米づくりが進められています。今後はさらに面積拡大を進め、契約栽培米としてのブランド力を強化していきます。



つちかおり米

昭和63年に灘神戸生協現・コープこうべ)からオール有機質肥料での米づくりの提案を受け、旧日高町、旧但東町、旧村岡町の3町で栽培がスタート。現在は、化学合成肥料成分を99%削減し、農薬も慣行栽培基準の5割減という厳しい栽培基準のもと、「コープスフードプランつちかおり米」としてコープこうべ組合員に提供されています。

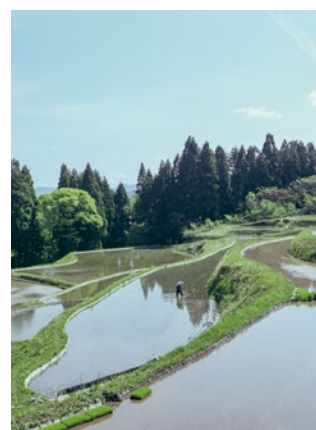
取り組み当初から、コープこうべ組合員との田植えや稲刈りの交流、職員研修会を実施しており、30年以上続く、但馬で最も歴史のある契約栽培米です。



みかた棚田米

県内有数の米どころ・但馬のなかでも特に米がおいしいといわれる、美方郡香美町の村岡区、小代区、新温泉町温泉地区に広がる棚田でつくられています。品種はコシヒカリで、昼夜の温度差が大きい気候と雪解け水に育まれた、抜群の甘みと旨みが特長。ふっくら、つやつやとした炊き上がりで、冷めてもおいしさが変わらないと好評です。

中山間地域のため、耕作放棄地の増加や獣害対策といった課題はありますが、この地域だからこそできる米づくりを進めています。



全国棚田百選にも選ばれた美しい風景

こうのとりのとり

カントリーエレベーター

平成27年、老朽化した豊岡・日高・出石のカントリーエレベーターを集約して「こうのとりのカントリーエレベーター」を設置し、稼働を開始しました。JAたじまが誇るブランド米を区分処理できるほか、火力を使わない「常溫除湿乾燥方式」を採用し、米の品質向上と環境への配慮を実現しています。



重点振興品目

近畿地方トップクラスの生産量を誇る「たじまピーマン」。江戸時代からこの地域につたわる「朝倉さんしょ」。この2つの特産品を「重点振興品目」として、行政と一体となり、但馬一円での生産拡大に取り組んでいます。

「たじまピーマン」

水田の転作利用を目的に、昼夜の寒暖差を活かして但馬各地で始まったピーマンの栽培。自動選別包装施設の導入やJAたじまの広域合併を契機に、但馬全域を一体化して産地とする取り組みがスタートし、「たじまピーマン」として「ひょうご推奨ブランド」「地域団体商標」を取得するなど、ブランド化を進めてきました。

栽培に有機質肥料を使用し、化学合成肥料の低減に努める一方で、夏季の高温による収量・品質低下、病害虫被害が課題。日射制御型拍動灌水装置の導入、病害虫防除の時期別作業の周知、栽培マニュアルの活用などにより、収量の安定・品質の向上を図っています。

今後は、京阪神市場の需要に応えるべく、既存生産者の栽培規模拡大、新規栽培者の募集、1本当たりの収量増に取り組んでいきます。



肉厚で歯ごたえ抜群。ピーマン特有の苦味も少ない



ピーマン協議会会長
霜倉 和典さん

ピーマンは中山間地に最適の特産品です。「たじまピーマン」を軸に、+αの品目を組み合わせれば平地の少ない地域でも農業経営が可能です。今後は担い手経営者の育成に取り組むとともに、ピーマン栽培を「産業」にまで発展させていきたいと思っています。

「朝倉さんしょ」

粒が大きく、香り高い山椒として知られるアサクラザンショウ。その名は、発祥の地である養父市八鹿町朝倉の地名に由来します。400年以上も昔からこの地で育てられ、江戸幕府への献上品になったこともある、伝統の特産品です。

その伝統を守り、販売拡大につなげていくため、但馬産のものを「朝倉さんしょ」として地域ブランド化。徹底した品質管理、気候に応じた栽培技術の確立などに取り組む、令和2年4月、地域団体商標の登録に至りました。

今後は、生産部会設立以降続けている新植の本数を増やして増産を図るとともに、増産量に見合う販路を確保すべく、「朝倉さんしょ」の最大の特長である爽やかな香りを武器に、さまざまなジャンルへの提案を進めていきます。



2



1 苗にタグ付けして品質管理を行う 2 優良苗をつくり、安定生産を実現



朝倉さんしょ部会顧問
福井 悦雄さん

朝倉さんしょの栽培は年々拡大し、今では但馬全域で栽培されるようになりました。和食や洋食、スイーツまで利用の幅も拡大しています。地域団体商標の取得を弾みに、より一層、栽培技術や品質、販路の拡大に取り組んでいきます。



昼夜の寒暖差が大きい但馬で育つピーマンは甘みが強い

地域振興品目

中山間地域に小規模な圃場が分布している但馬では、多様な栽培条件を活かした特産品づくりが進んでいます。「地域振興品目」として生産の維持・拡大に努めている特産品を紹介します。

岩津ねぎ

江戸時代、生野銀山の採掘従事者の冬の栄養源として栽培が始まったとされています。「岩津ねぎ」として出荷できるのは、朝来市で作られ、厳しい基準を満たしたもののだけ。「白根も葉も柔らかくて甘い」のが特長で、白根部分を作るための土寄せ作業や病害虫の防除、雪除け対策など、丁寧に育てられています。

離農者が増える一方で、農業研修制度などを利用した新規就農者も増えており、行政と連携した産地の維持・拡大が急務。販売も強化し、生産者の所得向上にも力を入れています。



霜や雪にさらされ、甘さと柔らかさが増していく

大納言小豆

但馬産の大納言小豆のなかでも美方郡で生産される「美方大納言小豆」は色鮮やかで煮崩れしにくいいため、和菓子に適していると高い評価を得ており、その希少性からブランド化が進んでいます。

生産者の高齢化などで美方大納言小豆の出荷量は減少傾向にありましたが、兵庫県産大納言小豆の需要の高まりを受け、豊岡市を中心とする大規模水稲農家に小豆栽培を推奨。汎用コンバイン・ビーンスレッシャーなどを利用して収穫を行うことにより栽培の省力化を実現し、栽培面積の拡大に成功しています。



粒が大きく、色鮮やかで煮くずれしにくいと好評

おおや高原野菜

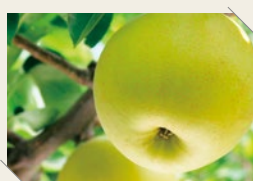
「おおや高原」には「野菜団地」があり、ホウレンソウや小松菜といった軟弱野菜の有機栽培を行っています。有機栽培は天候や病害虫の発生といった外的要因の影響を大きく受けます。加えて、「おおや高原」では「コープこうべ」との契約販売を行っているため、出荷数量を確保すべく、部会員が協力して栽培・出荷に取り組んでいます。

引き続き、有機栽培のための新たな生産資材の試験・検証、新規就農者の獲得、産地の維持・拡大、有機栽培という付加価値を活用した販売の実現に努めています。



JAS法による有機認証を取得した、安全・安心の有機野菜

その他の主な特産品



梨

美方郡を中心に二十世紀梨を生産。近年では早生品種「なしおとめ」が登場



神鍋高原キャベツ

かつて活火山だった土壌を活かして神鍋高原で生産



丹波黒大豆

主におせち料理用として朝来市を中心に生産

ファーマーズマーケットたじまんま

平成23年6月17日、但馬全域の生産者から農畜産物を集めて直売する、ファーム・トゥ・テーブルの販売所としてファーマーズマーケット「たじまんま」がオープンしました。

但馬全域の農畜産物を 新鮮なまま消費者に届けた

但馬地域は、広大な面積と高低差のある立地を活かして特長ある農産物が作られており、世界に誇る但馬牛の産地でもあります。こうした農畜産物を一カ所に集め、地元の消費

者に提供したいという、JAたじまと組合員農家の願いが叶い、豊岡市八社宮にオープンしたのが、ファーマーズマーケット「たじまんま」です。

当時は豊岡市内にも他の直売所がオープンしており、出荷者を募ることから始める必要がありました。たじまんまスタッフや営農生活センター職員の声かけと生産者の協力により、今では出荷者数が640名を超え、充実した品ぞろえとなりました。初年度年間12万人だった来店客は、令和2年度で31万人となっています。（来店客数はいずれものべ）

出荷農家にも来店客にも 満足してもらえる店づくり

出荷農家は、自慢の農産物に自ら値付けして店頭に並べることができ、「手取りが上がる」ことが一番の魅力となっています。また、少量でも出荷できることから、自給的農家の「いきがい」として農業の継続にもつながっています。

一方、来店者にとっては、新鮮で安全・安心な農産物、生産者の顔が見える農産物を買えることが何よりのメリット。たじまんまでは、JA間の直売所連携も積極的に取り組み、

但馬では作られていない農産物を仕入れるなどして、品揃えの一層の充実を図っており、来店客の満足度も上がっています。引き続き、より多くの方に但馬の魅力を感じてもらえる店づくりを進めていきます。



たじまんま出荷部会 会長
谷口 修さん

10周年を迎え、年々出荷者も売り上げも増えています。新しい栽培技術を生産者に情報提供し、出荷農産物の質を一層高めていきたいと思っています。

最近では、子ども食堂に農作物を無償提供する取り組みを始めました。地域に貢献できる直売所として発展していきたいです。



但馬地域で育った野菜や果物、米のほか但馬牛や花、加工品も販売

たじまんまの歴史



ルート便スタート

令和2年6月、豊岡と和田山を結ぶルート便が運行開始。各営農センターを巡回して集荷することで、店舗から離れた地域の生産者からの出荷が容易に。



来店客200万人突破

平成23年のオープン以来、順調に売り上げを伸ばし、平成26年には初年度売上2倍超となる4億4000万円を達成。令和元年6月、来店客が200万人を突破。



たじまんま和田山オープン

平成30年10月にオープン。スーパーマーケットのAコープとJAの直売所を同一店舗で共同運営することで、より充実した品ぞろえが実現。



但馬牛

深い溪谷などの急峻な地形が多い但馬地域で、古くから人々とともに暮らしてきた但馬牛。
日本が世界に誇るブランド牛のルーツとして、存在感が増しています。



名牛「但馬牛」の産地としての責任と誇り

「続日本書紀」にも登場
古来から続く優秀な血統

日本が世界に誇る「但馬牛」は、優れた伝統と血統を持っています。その起源は古く、平安時代に編さんされた「続日本書紀」で「耕運、輓用、食用に適す」と紹介されており、古来より優秀な血統として認められています。神戸ビーフや松阪牛、近江牛など人気のブランド牛は、但馬牛の子



水に恵まれ草木がよく育つ但馬の山間部で、但馬牛はストレスなく大切に育てられている

牛が各地で肥育されたものです。平成24年に実施された社団法人全国和牛登録協会の調べでは、全国の黒毛和牛の99・9%が但馬牛の「田尻号」の子孫であることが判明しています。

産地を守るために
畜産経営を支援

但馬牛の繁殖農家は、高齢化などの影響もあり、この20年で約200

戸が減少し、令和3年2月の時点で約140戸となっています。JAたじまでは、但馬牛の産地を守るため、畜産農家の経営支援として、低金利の資金融資、疫病発生時の対策支援などに取り組みできました。近年では、行政や関係機関と連携し、地域ぐるみで畜産経営を後押しする「畜産クラスター事業」を実施しています。

こうした取り組みのなか、インバウンド需要などに

伴う高級牛肉市場の活性化、経営拡大に意欲のある若手生産者や新規就農者の増加などにより、急速に経営の大規模化が進行。管内の飼養頭数は最も少なかった平成27年の約3200頭から、直近では4000頭を超えるまでに増頭しています。

「但馬牛」のブランド化を推進

平成19年にはJAたじまが兵庫県内の関係機関を代表して「但馬牛（たじまうし）」を地域団体商標に登録。平成27年には、伝統的な生産方法やその風土によって育まれた高い品質を評価し、その名称を知的財産として保護する制度「地理的表示保護制度（GI）」に「但馬牛（たじまぎゅう）」「但馬ビーフ」が登録されました。

こうしたブランド化を後押ししているのが、100年以上続いている但馬牛固有の血統管理。明治時代後期に牛の戸籍簿に当たる「牛籍簿」が整備され、血統や体形、繁殖能力に優れた個体を選別しながら生産が進められてきたのです。

この長きにわたって実践されてきた但馬牛の繁殖・肥育文化を、JAたじまなどで構成する「美方郡産但馬牛」「世界・日本農業遺産推進協議会が「日本農業遺産」に推薦。平成31年2月、「兵庫美方地域の但馬牛システム」として認定されました。



1 子牛市の様子。「但馬家畜市場」では年間10回セリ市が開かれている 2 日本農業遺産は、国内で重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域（農林水産業システム）を農林水産大臣が認定する制度



高い肉質が好評
日本一を誇る但馬家畜市場

昭和48年に開設された「但馬家畜市場（養父市）」は、平成19年に湯村家畜市場と統合し、但馬では唯一の家畜市場となりました。全国にある約100の市場のなかで、産地としての取り組みや肉質が高く評価されており、家畜市場として毎年上位にランクイン。令和元年には子牛平均価格で日本一を獲得しています。

地域ふれあい活動・地域貢献の取り組み

JAたじまでは、地域を盛り上げようと、住民の皆さんや組合員の皆さんと一緒に、さまざまなイベントやお祭り、子ども向けの農業体験などを企画・運営しています。

地域ふれあい活動

地域のイベントを盛り上げる

「地域ふれあい活動」は、組合員と役職員が一体となって地域の活性化に寄与する活動です。管内イベントへの参加のほか、地域の組合員自らが企画した行事の実施や、支店を中心とした「ふれあい祭」を開催しています。



1 男の料理教室
2 ふれあい祭
3 芋ほり体験



あぐりキッズスクール

子どもたちに食農体験の場を提供

小学3～6年生を対象に実施している食農体験教室。但馬の農業のファンを増やすため、平成21年度にスタートしました。地元の農家の皆さんに教わりながら、さまざまな特産品の栽培・調理を体験し、食と農のつながりを楽しみながら学ぶ教室です。



4 収穫体験
5 田植え体験
6 かまどで炊飯体験



地域貢献活動

子どもたちを育む取り組みに尽力

地域に根差した組織としての社会的責任を果たすため、さまざまな地域貢献活動を実施。ボランティア活動や小学生スポーツ大会の後援、中学生向けの自転車交通安全教室の開催、子ども食堂への食材提供などに取り組んでいます。



7 交通立ち番
8 自転車交通安全教室
9 スポーツ大会後援

主な事業の紹介

高齢者福祉事業



その人らしく生きる力を応援

3つの介護センター（豊岡・浜坂・南但）、2つのデイサービスセンター（豊岡東・七釜）、1つのショートステイ施設（豊岡）において、高齢者福祉事業を展開。介護保険事業や介護予防事業のほか、JA独自サービスとして「高齢者生活支援事業」も行っています。

共済事業



「ひと・いえ・くるま」をトータルにサポート

生命保険と損害保険の両方の分野の機能を併せ持つ「JA共済」は、相互扶助の精神に基づき、加入者の生命や住宅、自動車などの財産を守るための幅広い保障サービスをラインナップ。専門知識を持つ総合渉外担当者が中心となって普及を進めています。

信用事業



身近で便利なメインバンク

貯金をはじめ、融資や為替といった、いわゆる銀行業務といわれているのがJAの信用事業。JA（農業協同組合）、県信連（信用農業協同組合連合会）、農林中金（農林中央金庫）が緊密に結びつき、「JAバンク」として各種金融サービスを提供しています。

子会社事業の紹介

（株）ジェイエイサポート



暮らしを幅広く支える

有料道路料金収受事業や清掃事業に加え、空き家や土地の有効活用をお手伝いする資産管理事業や人材派遣事業を実施しています。また、高齢化に伴う相続案件の増加に対して、専門家と連携してお悩みに対応する「相続安心サポート」に取り組んでいます。

（株）ジェイ・アクロス



快適なカーライフを実現

管内各地でガソリンスタンドを運営するほか、3つの自動車センター（出石・村岡・和田山）では自動車整備や車検対応を取り扱っています。お客さまに気持ちよくご利用いただくため、スタッフの接客力・技術力の向上につとめています。

（株）ジェイエイ葬祭



多様な葬儀に対応

「メモリアルホール ゆうなぎ」（豊岡・日高）では、会社葬や家族葬まで人数や様式に応じて多様な葬儀に対応しています。利用者から信頼いただける葬儀社となるため、葬儀プランの提案力や施工技術、接客能力などスタッフの能力向上につとめています。

合併から20年

太田垣 哲男組合長 × 職員 JAたじまの未来を語る

合併した年に入組し、組合員とともに歩んできた5人の職員。
この20年間に感じたJAたじまの変化や課題について、太田垣組合長と語ります。
これから私たちが目指すべき姿は一。



日高支店業務次長

伊藤 紫

(入組時：村岡支店業務課)

JAたじま代表理事組合長

太田垣 哲男

温泉営農生活センター次長

飯野 友裕

(入組時：村岡営農生活センター)

金融共済部ローン推進課課長

吉井 正和

(入組時：日高支店業務課)

営農生産部特産課課長

稲葉 博通

(入組時：和田山営農生活センター)

入組して20年、
それぞれの思い出を語る

太田垣 合併から20年、それぞれ一番印象に残っていることからお話しいただきますでしょうか。

稲葉 はい。合併20年ということは、入組20年経ったんだなと感慨深いです。県外から来て、右も左も分からず営農に携わり、組合員や先輩職員に育てていただきました。最初に勤務した地域の皆さんとお付き合いは今も続いている宝物です。丹波黒大豆や岩津ねぎといった特産品の振興に関わったことも印象深いです。

飯野 私は、農協に入ってすぐに生産者部会を担当したことです。当時は葉タバコの部会があったのですが、その葉っぱを見たこともない農業の初心者でした。キャベツの栽培についても分からないことだらけで、先輩や生産者の皆さんに教わりながら苗づくりなどに取り組みました。怒られたり、感謝されたり…。当時の部会の皆さんのことは忘れられません。

吉井 あつという間の20年でした。仕事を始めたばかりの頃、融資専任担当になり、目標を達成できず円形脱毛症になったことも、今ではいい思い出です。つらい思いをした分、諦めずにがんばる精神力や、乗り切るために工夫する知恵を養うことが

できました。後輩が壁にぶち当たっているのを見たら、こうした体験を話して、励ますようにしています。

伊藤 私は、平成30年に全国窓口担当者の交流会に参加したことです。印象評論家の重太みゆきさんの講演があり、接客における第一印象の重要性について学びました。笑顔の大切さを改めて知り、今も実践を心がけています。また、全国の窓口担当者、職場の課題について意見交換したことも良い経験になりました。

木谷 平成16年、台風23号の水害に遭ったことです。当時、豊岡北支店に勤務していましたが、支店も事務所も、自宅も水没。日中は事務所の清掃と自動車や建物共済の請求に走り回り、夜は自宅の清掃、土日は旧本店にこもっての査定業務で、4カ月ほど休みはなく、心身ともボロボロになりました。でも、一生懸命がんばったおかげで、組合員さんから

「JA共済に入っていてよかった」「よく勤めてくれた」「共済ってすごいな」と感謝されました。また、「木谷君に任せたら間違いない」と他の組合員を紹介してもらえるようになりました。入組4年目にして、共済事業の意義にも気づかされました。

**時とともに、
変化した人や地域**

太田垣 それぞれの20年間であったんです。では、その20年間で、変わったことは何でしょうか？

稲葉 10年ほど前に、日高町に家を構えました。誘われるまま地元元の消防団に入ったんですが、地域の行事に参加するきっかけになり、顔なじみも増えて、それが仕事にも良い影響を与えています。

太田垣 職員の皆さんには、前々から地域で認められる人になってほし



営農生産部米穀課課長
木谷 和喜
(入組時：出石支店営業課)

いと言っていました。すごくいいことだし、うれしいです。

飯野 但馬地域では、JA以外に生産資材を扱う店舗が増えました。かつては組合員の購買はJA中心でしたが、ネットショップも手軽になったことで選択肢が増えています。JAならではのメリットや付加価値をPRしていく必要性を感じています。

伊藤 信用事業でも、インターネッ

トが活用されるようになり、ネットバンクやネットローンなど、非対面でのサービスが増えました。来店が不要なため、忙しい方を中心に大変重宝されています。

吉井 私は、働き方に変化を感じています。かつて月末は貯金集めなどで忙しく、職員は夜遅くまで働いていましたが、近年は早く帰れています。JAたじま全体が効率よく、計画的に動いているのだと思います。職場の雰囲気もとても良いです。

太田垣 なるほど。経営者側も職場の環境改善には力を入れています。職員の健康やゆとりは、良い仕事につながります。

吉井 そしてやはり、新型コロナウイルスの影響は大きいです。以前のような気軽な訪問はできない一方、アポ取りをすることで、時間を確保して、話をじっくり聞いていただけ



「この地域で採れたものをしっかり発信していきたい」——稲葉



「若い世代にJAを利用してもらえるよう、栽培指導や経営指導も積極的に」—— 飯野

るなど、新たな発見もありました。
木谷 私は大人になりました(笑)。組合員の皆さんや上司など、たくさんの方に厳しくしてもらったから今の自分がある。言葉遣い、マナーなど、怒られてばかりだった自分が、いつの間にか部下を指導するようになっていきます。愛情を持って叱る一方で、部下が困っている時は黙って手を差し伸べるなど、自分なりに良い人間関係を築く努力をしているつもりです。

次の世代につなぎたい、JAたじまには強みがある

太田垣 ここでJAたじまの強みについて語ってもらいましょう。次の世代につなぎたいものはなんですか？

飯野 おいしい米、ピーマン、ネギ、

小豆、梨などの特産品です。コウノトリや但馬牛など歴史やストーリー性のあるものもアピールポイントです。これだけそうう地域は、他になかなかないのではないのでしょうか。
稲葉 但馬の農産物は、全国で高く評価されています。生産者の継続的な努力の結果です。子どもたちには、但馬出身であることを誇りに思ってもらいたいです。

太田垣 確かに、この地域一円に誇れる特産品があり、JAたじまにはそれらを一体化して発信できる組織力があります。環境に配慮した農業と、但馬ならではの特長ある品目のブランド化を基本として営農振興を進めております。なかでも、コウノトリ育むお米の取り組みは数々の賞を受賞するなど対外的にも高い評価を頂くまでに成長してきていますね。

伊藤 はい。JAの強みは総合事業性にあり、信用や共済事業でも、組合員の皆さんにメリットを感じていただいています。こども共済、自動車共済、マイカーローンなど、ご家族のライフサイクルに応じた商品やサービスの提案が可能です。地域の皆さん一人ひとりと末永くお付き合いできます。

吉井 地域での知名度も強みです。皆さんが「農協さん」と呼んで気軽に接してくれます。この良い関係を次の世代にもつなぎたいです。



「正組合員と准組合員をつなげる取り組みが必要」—— 吉井

木谷 同感です。他社にも魅力的な競合商品があるにもかかわらず、「農協さんだから」といって利用してくれる人がいます。それこそが、JAたじまの強みです。後輩には、積極的に地域行事に参加し、仕事以外でも地域や人とながりを持つことを勧めています。

組合員と向き合う中で感じる課題とは…

太田垣 では、JAたじまは、組合員から、何を求められているのでしょうか？

稲葉 農業振興だと思います。また、何でも相談できる、身近な存在として必要としていただいています。

飯野 今は、出荷先の選択肢が増え、JAを頼らずとも仲間を作ったり、苗が手に入ったりしやすい時代です。

世代交代が進む中、若い世代にJAをどう利用してもらうかが課題です。JAが選ばれるには、組合員の所得増加や農業の継続につながる、より専門的な栽培指導や経営支援が必要ではないでしょうか。

伊藤 私、専門知識を持った職員の育成と、高齢者と次世代の両方に信頼される組織運営の重要性を感じています。IT技術を商品やサービスに取り入れ、組合員のニーズに合った商品・仕組みの開発、利便性の向上を追求していくことが大切です。

吉井 私は、正組合員と准組合員をつなげる取り組みが必要だと考えます。ローンなどを希望される方に、新規で組合員になっていただくことがあります。JA最大のメリットである総合事業性をご理解いただくまでにはなかなか至らないからです。ファーマーズマーケット「たじま

これからも地域に愛される「JA」へ



「組合員の安心を支える、幅広い知識や情報を提供していきたい」——伊藤

ま」のような生活に身近な事業をきっかけに、総合事業のメリットを多くの人に享受していただきたいです。

太田垣 そうですね。その取り組みの一つが利用高配当です。JA たじまでは、正組合員、准組合員に関わらず、利用していただいた方により多く還元する方針をとり、好評を得ています。

木谷 他にも、JA にしかできない事業を模索できないでしょうか。営利追求だけではない、地域に根差した取り組みこそが、私たちの存在価値だと思います。

太田垣 そうですね。地域から求められる組織を目指さないといけない。その一環として、令和3年度の事業計画にフードバンク事業を盛り込みました。ファーマーズマーケット「たじまんま」の一面に、生産者が寄付したい野菜などを並べて、必要な人が

持ち帰れるスペースを設ける予定です。また、JA たじまは、規模の大小に関係なく、担い手を手厚く支援したいと考えています。

**語りつくせない熱い思いがある！
未来のJA たじま**

太田垣 最後に、未来のJA たじまがあるべき姿を、どう考えていますか？

稲葉 農業を守るために、この地域で採れたものをしっかりと発信していくことが大切です。時代のニーズをつかみ、農家の皆さんに伝えて、儲かる農業を続けてもらうよう働きかけていきたいです。また、農家や組合員が、気軽に利用できる情報交換の場であるべきだと考えます。

飯野 私も、但馬のブランド力を伝承するためのお手伝いがしたいです。

「農協があつて良かったな」と言ってもらえるように、がんばりたいです。
伊藤 組合員の安心を支えられるJA たじまであれたらいいなあと思います。そのために、ライフイベントに合わせたセミナーや相談会を開催し、幅広い知識や情報を提供していきたいです。

吉井 期待や要望は組合員ごとに違います。その一つひとつに対して、職員一人ひとりができることを全うしていれば、必要としていただけるようになるのではないのでしょうか。

木谷 そう思います。JA たじまは、合併により、管内では最大級の組織になりました。この規模が大きいという優位性をもっと生かせると思うんです。地域のつながりの中で、職員一人ひとりが小さな感動を積み重ねることで、次の世代にも必要としていただけるはず。もし、その感動

が都会に住んでいる組合員のお子さんに伝われば、将来帰ってきた時に農業を始めようという気持ちになるかもしれません。JA とお付き合いするきっかけにもなるでしょう。

太田垣 そうですね。私は毎年、新入職員に「いい職場を選びましたね」と話しています。人の生活に関わる仕事は、人を幸せにできます。地域が必要とされる喜びがあります。また、但馬には、「コウノトリ育むお米」や「但馬牛」といった世界に自慢できる特産品があります。但馬で生まれたコウノトリが各地で巣作りをし、その生息域を広げているように、但馬の特産物をもっと羽ばたかせたい。農協の歩みの中で、そしてこれからも、組合員の皆さんの応援は必要不可欠です。その先の、元気なJA たじまに期待していただけるよう、がんばりましょう。



「地域に根差した取り組みのなかで感動を積み重ね、次世代につなげたい」——木谷



皆様のおかげで広域合併20周年



